

日本語の多様性を表現する「方言×アートプロジェクト」 かわりゆくかたつむり展

*“Dialect × Art Project” Expressing the Diversity of the Japanese Language
Changing Snail Exhibition*

岡川 卓詩 OKAGAWA Takuji

(美術領域)

伊藤 明倫 ITO Akihito

(静岡理科大学情報学部情報デザイン学科)

谷口 ジョイ TANIGUCHI Joy

(静岡理科大学情報学部情報デザイン学科)

1. はじめに

言語・方言の衰退は多くの国や地域で見られ、我が国においても、消滅の危機に瀕した言語・方言（以下、危機方言）が複数存在する。危機言語・方言を対象とした記述的研究は、国立国語研究所を中心に行われており、プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」において、主に琉球語諸方言についての記録・記述が進んでいる。その一方で、特に本州方言については、メディアの流入、交通の利便性向上により共通語化が進み、その話者が激減しているにも関わらず、データの蓄積・整理は進んでいない。本研究では、「カタツムリ」を表す地域方言を対象として、さまざまな地域において、どのような方言語彙が使用され、どういった言語変化・変異が見られるのかを調査した上で、これらをアートによって表現し、一般市民を主な対象とした展覧会の開催により、方言衰退の実態について地域社会に広く発信する。また、それと同時に、言語・方言の多様性をサインやシンボルなど多様なヴィジュアルとして表現することで、普遍的な視覚コミュニケーションを探ることを目的とする。

2. かわりゆくかたつむり展

2-1. 展覧会の概要

約100年前、民俗学者の柳田國男は、日本全国で「カタツムリ」をどのように言うか調査をした（柳田，1930）。その後、国立国語研究所が1950年代から60年代にかけて、およそ2,400の地域で、その土地から出たことがない高齢の男性を対象に、方言の調査（図1）を行った（国立国語研究所，1972）。この調査から、半世紀前には、「カタツムリ」を表す語が400以上もあったことが分かった。

これを何と言いますか。からを背負ってのろのろとはって歩きます。夏、ことに雨の頃多く見掛けます。



図1 調査票

本展覧会では、日本の言語・方言の多様性をアートの力で多くの人に知ってもらうために企画し「カタツムリ」の方言を主題対象として名古屋芸術大学15名と静岡理科大学9名の学生による共同研究や制作物の成果物を展示した（表1）。

表1 展覧会概要

展覧会名	方言×アートプロジェクト2023 かわりゆくカタツムリ展
期間	2023年12月3日(日)～12月8日(金) 13時～19時
場所	長者町コットンビル1F GROUND
参加者	新井紀奈乃・石川清菜・近藤勇飛・桜井遼介・社本美穂・出口佳音・鳥居祐里・流田李咲・藤原暖生・堀川ほのか・山本星・吉村春紀・金原早紀・浅井優菜・リンイチュウ（名古屋芸術大学美術領域コミュニケーションコース） 海野泰良・川崎大嬉・後藤大貴・新聞文也・野田悠泰・待井晴紀（静岡理科大学 情報デザイン学科先端アート研究室） 峯尾海成・早坂ゆかり・藤本亘（静岡理科大学 応用言語学研究室）
企画・監修	伊藤明倫・岡川卓詩・谷口ジョイ
来場者数	約49名

2-2. 研究及び制作計画

展覧会までの研究及び作品制作は次のような計画を立てた。主に方言調査を谷口が担当、研究成果の作品化を伊藤、岡川が担当した。

- ① カタツムリの方言に関する研究の概要をまとめる（主に谷口が担当）
- ② 各地で使用される「カタツムリ」を示す方言語彙について調査を行い、方言語彙の使用状況を明らかにして、一覧表としてまとめる（主に谷口が担当）
- ③ 学生によるディスカッション。各大学の学生はカタツムリの方言からどのような表現や手法によって可視化するかをリモートでディスカッションする
- ④ 研究成果の作品化。②の調査結果をアート作品として可視化する（主に伊藤・岡川が担当）

2-3. 展覧会までの工程

研究及び制作計画に基づいて、以下のような工程を経て展覧会に至った。

① カタツムリの方言に関する研究の概要をまとめる

「カタツムリ」を表す語の抽出にあたっては、実施期間および人員、予算を考慮し、国立国語研究所によって実施された調査項目に焦点を当て、全国方言分布調査（FPJD）調査結果・新日本言語地図（NLJ）データを用いた。これは、国立国語研究所が1957年から1965年までの間、全国2400地点で各地生えぬきの老年層を対象として行った調査である。具体的には、「原則として1903（明治36）年以前の生まれの男性で、3歳から15歳までの、いわゆる言語形成期をその集落で過ごし、以後、他集落に居住しても3年以内である土着の人1名」について、なぞなぞ式質問方法（図1参照）により調査したものである。被調査者として男性を選んだ理由としては、女性は結婚のために複数の地での居住歴をもつ場合が多いと考えられたためである。

② 各地で使用されるカタツムリ方言語彙について調査を行う。カタツムリ方言語彙の使用状況を明らかにして、一覧表としてまとめる

上記調査から作成された『日本言語地図（LAJ）』（図2）に基づき、カタツムリを表す地域方言を一覧にまとめ、照合できるように日本地図による分布図を作成した。

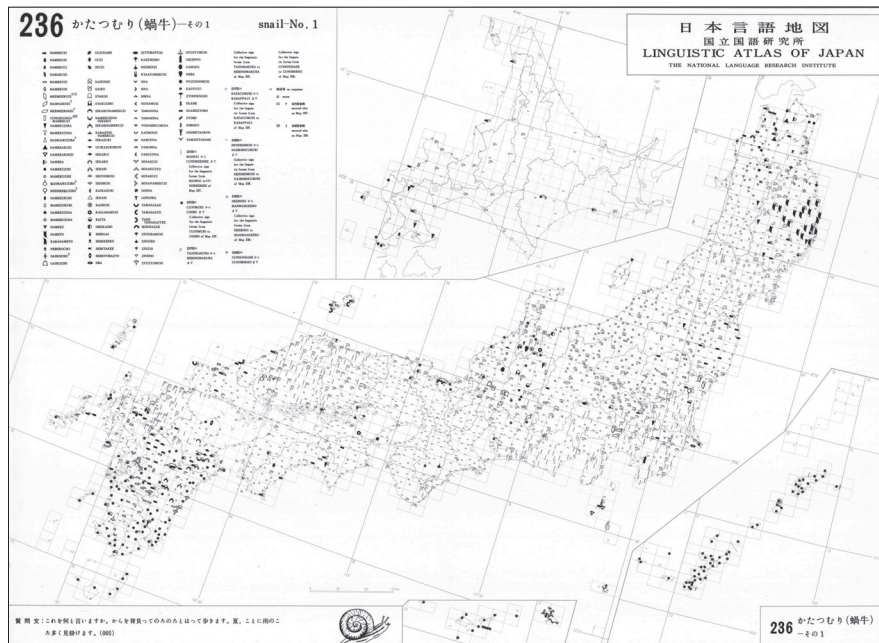


図2 日本言語地図（LAJ）

③ 学生によるディスカッション。各大学の学生はカタツムリの方言からどのような表現や手法によって可視化するかをリモートでディスカッションする

名古屋芸術大学と静岡理工科大学の学生によるリモートディスカッションは2023年8月

3日にZOOMで実施され、学生同士による研究、作品の紹介などがあり、異分野交流が活発に行われた（図3）。また方言の可視化方法についても議論され、カタツムリに限定せず、言葉の持つイメージから作品化することが決定した。



図3 ZOOM会議の様子

④ 研究成果の作品化。②の調査結果をアート作品として可視化する

「方言地図」から各自で作品制作したい方言を他の出品者と重複しないように選択する。

名古屋芸術大学の学生は、主に「美術実技Ⅲ-3」の授業内で制作を進めた。カタツムリの固有名詞に囚われないよう「マンダラート法」を実施することで言葉のイメージを広げて、複数のアイデアやエスキースを制作した（図4）。3週間の制作期間を経て、中間プレゼンテーションと講評会を行い、今後の進め方や質を高めるための修正点などを確認した。さらに各自で展覧会開始まで制作を進めて、完成を目指した。

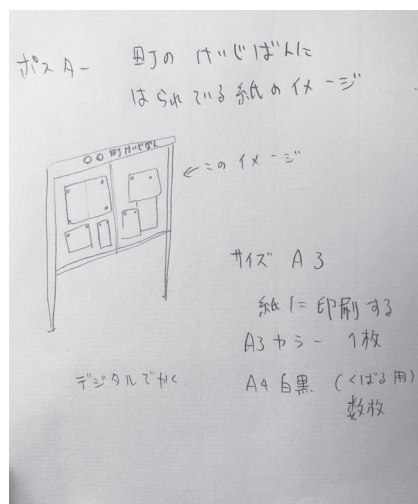


図4 エスキース

静岡理工科大学の学生は、ゼミで制作と情報の共有を行なった。各自が卒業研究で進めている制作技術をベースにして、カタツムリの方言イメージを具現化していった。毎週、ゼミの時間に行なったディスカッションでは、制作途中の作品について議論を交わし、技術的な情報交換も行なった。具体的に使用したアプリケーションは、Adobe Illustrator、Photoshop、premier、Aftereffects、Aero、blender などである。

また、展覧会のチラシデザインにおいて、学生（待井晴紀）がタイトルロゴタイプ（図5）とイラストを担当したので、展覧会全体のイメージ共有もしながら進化した。



図5 展覧会ロゴタイプ（制作：待井晴紀）

3. 展覧会

3-1. 展示

展覧会は愛知県名古屋市長者町のビル1階にあるギャラリースペース「長者町コットンビル1F GROUND」で開催した。長者町地区は2010、2013、2016年のあいちトリエンナーレの会場になっており、現代アートで活性化された地域で、市民にもアートに対して寛容で理解してもらいやすい環境である。

開催時間帯は近隣のオフィスで働くサラリーマンの往來を多く見かける場所で、アート関係者以外も来場しやすい立地になっている。展覧会場の入り口は扉のない幅3.5m、高さ4mほどの大きな間口で、作品が展示されているエリアまで8mの距離があり、次のエリアまで続く廊下のようにになっている。そこを導入エリアとして、入口正面から見て右壁面に本展覧会のあいさつ文パネルと作品に使用したカタツムリの方言語彙の方言地図パネルを設置した（図6）。作品を鑑賞する前に来場者が企画意図を理解して、カタツムリの方言について興味を持つことができるような導線にしている。パネル隣には小学生の名札と同じようなサイズと素材を用いて、カタツムリ方言語彙の印字入りプレート（図7）を50枚ほど展示した（図7）。このプレートは本展覧会チラシの表紙にも使用されており、会場でも最初の扉を開くような感覚を体験できるようにした。

導入エリアの突き当たり正面には、本展覧会タイトルがカッティングシートで壁面サイ



図6 挨拶文と方言地図パネル



図7 カタツムリ方言のプレート



図8 入口タイトル



図9 展示の様子

ズに貼られており（図8）、展覧会会場の入口から目視できるようになっている。実際にこれを見て、興味を示して来場した鑑賞者も数名いた。

展示エリアは名古屋芸術大学の学生15名、静岡理工科大学の学生6名による作品が混交するように展示がされ、2D・3Dアニメーションやイラストレーション、AR、立体、絵画と幅広い表現の作品が並んだ（図9）。各作品横に配置されたキャプションは作者名や作品タイトルの基本情報だけではなく、作品に使用したカタツムリの方言語彙と場所、方言についての詳細な解説も記載され、視覚表現と同時に展示されることで方言の知識をさらに深めることができるようにした。

3-2. 作品

本項では、展示された21作品のうちアンケートやインタビューで反応や評価の高かった3作品に焦点を絞り、本研究の目的である方言の実態や多様性について視覚表現によって伝えることができた作品であるかを考察する。

(1) 「賃貸」石川清菜〈チンタイ〉（図10）

アンケートでも展覧会の意図に最も合っている作品として、一番多くの票を集めた。「チンタイ」を「賃貸」の発音にかけて、想像を膨らました作品である。人間ではなくカタツムリたちの賃貸住宅の募集ポスター4枚を町内掲示板のように貼った展示になっている。カタツムリの殻は一般的に家として例えられることが多く、「チンタイ」はそこから誕生した方言だろうかと思像する楽しさを与えている。



図10 「賃貸」石川清菜

「賃貸」から「住宅」へ言葉のイメージをうまく連想させた作品といえる。また極小空間をうまく活用する日本の印象を捉え日本文化らしさもあり、鑑賞者へ方言語彙と視覚イメージの両方を伝えることができている。

方言：チンタイ

使用地域：鹿児島県（沖永良部島）

「ツブラ・ツダラメ系」であり、類似したものに、チンヅァン（沖縄県西表島）、チンナミ（沖縄県島尻郡）、チンニヤマァ（鹿児島県奄美大島）などがある。かつて女の子は六、七歳になると髪を頭のでっぺんで巻いて竹串を差す風習があり、これをチンタイグといった。沖永良部島のカタツムリは固有種である。

(2) 「image」待井晴紀〈ニュードウムシ〉(図11)

41秒の短い時間の映像作品であるが、実写とモーショングラフィックスを心地よいリズムで構成している。カタツムリの殻の3DCGから始まり、月夜の雨や蓮の開花、葉が流れるようなアニメーションは、どこことなくカタツムリが生息しやすい湿度の高い環境を感じさせる。あじさいの葉の上を進むカタツムリの実写映像に合成され



図11 「image」待井晴紀

た背景は、認識できるかできないかの速さでカタツムリの持ついくつかのイメージ映像に切り替わっていく。最後に「What do I look like?」という文章が表示され、ニュードウムシの解説文で終える。作品のタイトル通りカタツムリの持つイメージを断片的に映像で表現することで、方言の言語変化について考えさせる作品となった。

方言：ニュードウムシ

兵庫県（淡路島）

淡路島の方言は、大阪湾の対岸である大阪や和歌山、藩政時代に関係の深かった徳島との共通性が高いと言われている。「入道虫」は、幼虫が成長して大きくなったもの（ニシドチとも呼ばれる）や地虫を指すが、当時の淡路島ではカタツムリを意味した、というのは興味深い。

(3) 「キャーなめプリン」出口佳音〈キャーナメクシ〉(図12)

展示会場正面に設置された作品で、本展覧会のキービジュアルのような役割もしており、通りすがりに見て興味を示し入場した来場者もいた。ナメクジとプリンを合成した大

高さ60cmほどの架空生物を表現したオブジェ1体と、同じ形態で20体以上の手のひらサイズのオブジェで構成された展示になっている。「なめプリン」と「ナメクシ」には文字の重りはないはずだが、なぜか言葉の印象を近くに感じてしまう言葉のずれや、プリンとカタツムリの持つねっとりした質感をうまく活用して視覚的インパクトを与えている。視覚から言語変異が起こり得る可能性を提示させる作品である。

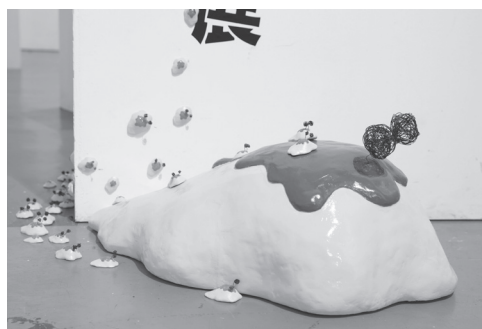


図12 「キャーなめプリン」 出口佳音

方言：キャーナメクシ

使用地域：佐賀県

「キャー」は、佐賀方言で「貝」を意味する。また、「ナメクジ」は「カタツムリ」を表す最も古い方言形のひとつと考えられている。柳田國男の『蝸牛考』の中には、九州の一部や壱岐の島などでは、カタツムリ、ナメクジの双方とも「ナメクジ」と呼ばれている、とある。

3-3. 評価と考察

本展覧会期間中に、紙媒体と Google フォームを利用した2種類用意して、来場者対象にアンケートを実施した。回答者は20名でデータ不足のため信頼性のある分析はできないが、データの限界を認めた上で考察を行う。

本展覧会の意図である『あなたはこの展覧会に挨拶文に記載されている「展覧会の意図（日本語の多様性について考える）」を感じますか。』の質問に対して「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の5段階評価をしてもらった結果「とてもそう思う」「少しそう思う」の回答率は70%であった。また『あなたはこの展覧会に「方言の重要性」「日本語の多様性」を感じますか。』の質問では「とてもそう思う」「少しそう思う」の回答率が75%あった。これから本展覧会を通して「方言の重要性」「日本語の多様性」を概ね伝えることができたと示唆する。

また自由記述でも「方言という言葉の多様性を通じて、自らの認知・認識の幅を拡張することができる展示でした。」「アートを通して、楽しく日本語の多様性を知ることができました。」「“カタツムリ”でも地域によっていろいろな呼び方があることを初めて知って、おもしろいと思いました!」の回答があり、本研究の目的である方言の実態について発信できたと考えられる。一方、「感じにくくわかりにくい感じがした。」「表現の自由度が高いため、テーマ性や展覧会の意図がやや弱く感じられる。」などの意見もあり、作品の

表現幅が広がったため、方言語彙より視覚表現の方が強く表出したことが原因だと考える。

4. まとめと今後の課題

本研究では、展覧会開催の実践を通して、方言衰退の実態について地域社会に広く発信し、言語・方言の多様性をヴィジュアルとして表現する事で、普遍的な視覚コミュニケーションを探っていくことを目的とした。方言の調査を綿密に行い、多くの方言から「カタツムリ」の方言語彙だけを対象にしたことで、一般市民にわかりやすく方言の現状を発信できたと考える。また多様なアプローチを試みて、方言をヴィジュアル化した表現の幅広さも方言語彙に対する視野を広くする機会を提供できたのではないだろうか。

ただアンケートの自由記述にも「積極的な交流があると良い」と書かれていたようにシンポジウムを開催しなかったことにより、交流や議論が積極的に行われなかった。今後、ヴィジュアル表現の発信方法はアートによる展覧会だけではないため、ウェブサイトでの発信やワークショップの実施など、言語・方言の多様性をさらに幅広い視覚表現によって発信していく。

参考文献

柳田國男『蝸牛考』刀江書院 1930

国立国語研究所『日本言語地図 第5集』大蔵省印刷局 1972 第236～238図